

コメントライナー

第6448号

2018年5月14日(月)

◎「近助」というマナー

防災・危機管理アドバイザー 山村 武彦

◆遠水は近火を救わず

都市の真下で発生し、甚大被害をもたらす直下地震。典型的なのが阪神・淡路大震災(1995年)である。地震当日に死亡した5,036人のうち3,842人(76%)は地震発生から1時間以内に亡くなっており、9割が倒壊建物による圧迫死(圧死、窒息死など)という凄まじさ。全壊建物は10万4,906棟、建物の下敷きになった自力脱出困難者は約3万5,000人に上った。その77%は家族や近隣住民によって助け出されている。

大規模災害発生時、建物だけでなく道路や橋などが損壊し、消防、警察、自衛隊がすぐに駆け付けることは物理的にも困難である。阪神・淡路大震災で亡くなった人のうち、84%は地震後14分以内に死亡との報告もある(兵庫県監察医)。つまり、早く助けなければ助からない。遠水は近火を救わず、早く助けることができるのは近くにいる人だけである。近くにいる人同士が助け合う「近助」の共有が極めて重要。

◆ほどよい距離間で助け合う

ひと一人では生きていけない。多くの人たちの存在・努力によって社会が成り立っている。だからこそ「自分でできることは自分で対応」が基本である。しかし、身体が不自由であれば自分でできることに限りがある。元気な人でも時には病気になるし、誰でもいつかは年をとる。それでも可能な限り自分のことは自分でした上で、これ以上対応できないときは隣人や行政に助けを求めていいのである。

隣人同士どこかで支え合い、助け合いながら生きている。それがお互い様である。プライバシーは深入りせず、べたべたした付き合いは不要。「ほどよい距離感」で隣人に関心を持ち、困っているな、変だなと思ったら、いつでも近くにいる人がためらわずに声をかけ、傍観者にならない。それが「近助」である。

◆いじめ、セクハラも「近助」で守る

地域防災は「自助」「共助」が基本といわれてきた。私はそれに「近助」を加えることを提唱している。自分や家族を守る自助は当然だし、自主防災会や自治会を通じてみんなで助け合う共助も大切である。一方で災害時の「みんな」はあまりにも漠然としていて無責任とさえ感じる。発災時は遠くのみんなより、顔の見える近くの人頼りになる。「共助」と共に、構築すべきは向こう三軒両隣の安否確認チームの「防災隣組」と「近助」である。少子高齢化社会では防災隣組があれば日頃の見守りにも役に立つ。

「近助」は地域だけでなく学校、職場、出先、その場その場の困った人に手を貸すこと。いじめ、パワハラ、セクハラも最初に気づかなくていけないのは近くにいる人である。近くの人が助け、守るしかない。それは人類共通のマナーである。この「近助」という概念は事業所、自治体、国家間にも当てはまる。反目し合うのではなく、敬意の持てるほどよい距離間で助け合う。「近助」があれば、絶対安全ではないけれど、少しは安心できる社会になるのではなかろうか。

(やまむら・たけひこ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003